

# 日本におけるダンス報道 —モーリス・ベジャールとジョルジュ・ドン事例として

## A newspaper coverage of dance in Japan -with a case of Maurice Béjart and Jorge Donn

1K09B149-5 中村 優子  
主査 リー・トンプソン 先生 副査 杉山千鶴 先生

### 【目的】

平成 20 年、日本の学習指導要綱が改訂され、中学校保健体育で、ダンスが必修化されたことは、記憶に新しい。日本においては、「保健体育」では、「スポーツ」が教えられているとみなされるが、果たしてダンスは、「スポーツ」の領域にあると考えられるのだろうか。芸術の一分野だと考えるほうがより自然なのではないだろうか。当研究はこの問題意識から出発した。

ダンスはスポーツとみなされるか否か議論するにあたり、当研究では、メディア分析の手法を用いて分析することにした。ダンスの報道は、スポーツと同じ物語を語るのか。あるいはまったく異なったナラティブを提供するのか。差異があるのなら、それはどういう点に見られるのか、検証することを試みた。

ダンス報道の例として、世界的に活躍し、かつ日本のバレエ団等とも密接な関係にあった振付家およびダンサーである、モーリス・ベジャールとジョルジュ・ドンの記事を分析の対象とした。ダンスの報道、今回の研究では新聞記事を分析した。

スポーツの報道と比較するにあたり、ジェンダー・セクシュアリティの問題と、教える者・教えられる者の権力関係、この二点に主眼をおいて比較することにした。

スポーツの報道と比較することにより、日本において、ダンスはどのように語られるのかを検証した。

### 【方法】

ベジャールとドンのふたりについて同一記事内で報じられる新聞記事を、内容によってコーディングし分類した。新聞三紙（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞）の記事を調査対象とし、データベースを使い「ベジャール」と「ドン」という語句の両方を含む記事を検索して、ヒットしたものを対象とした。この研究の目的にそぐわないものは除外した。期間は検索できる全期間とした。対象となった記事を、二人の関係を表す語句によって以下のようにコーディングした。

1・バレエ団員・振付家とダンサーとしての関係（ベジャールが振付け、ドンが踊ったという内容のもの。過去の作品の解説を含む。）

2・弟子、生徒など、上下関係

3・とりわけ親しい関係

4・特に関係が明示されていないもの

### 【結果】

表1 朝日新聞  
コーディング結果

1	40
2	1
3	2
4	13
×	53
計	109
有効	56

表2 読売新聞  
コーディング結果

1	19
2	2
3	1
4	20
×	38
計	80
有効	42

表3 毎日新聞  
コーディング結果

1	9
2	1
3	6
4	7
×	20
計	43
有効	23

各社、1が多かった。2はほとんどなかった。3は、少ないが、全くないわけではなく、スポーツの報道では見られないような語彙で語られるような例も見られた。

### 【考察】

ジェンダー・セクシュアリティの問題を考察するにあたり、芸術家の報道とも比較した。芸術家について語られるときに、性愛、特に同性愛について言及されることはタブー視されていない。一方、スポーツにおいてはホモフォビアが見られる。ベジャールとドンは、同性同士であるが特に親しい間柄だったようだが、それを明示的に著している報道はほとんどなく、ダンスはこの中間に位置する語彙をつかって報道されるようだ。

師弟の関係については、数がほとんどなく、今回の研究からはっきりわかることはない。スポーツと同じような表現で語られるものも存在し、スポーツとは異なると言い切ることもできないが、記事全体に対して占める割合は非常に少なかった。

そのほか、1、つまり単純な報道が多いのは、これはジャーナリズムが成熟していないとも考えられる。観劇体験の機会が著しく少ないことや、教育の中で、鑑賞する対象としてのダンス教育が行われないことに起因するのではないかと推測される。

以上の結果から、日本では、ダンスを理解する枠組みが定まっていないように思われ、報道においてもダンスが定まらずスポーツ、芸術の中間に位置するような表現で語られるようである。